



三浦哲郎一家が住んだ家（岩手県二戸市金田一字湯田）
2010年5月2日、中野渡一耕撮影

小説の舞台になった温泉は全国各地にあるが、本県にも文学者とゆかりのある温泉が多い。水上勉「飢餓海峡」の舞台になった湯野川温泉、井上靖が滞在した下風呂温泉、吉川英治が滞在した温川温泉などがある。浮かぶ。今回は、先年亡くなった本県出身の作家、三浦哲郎（1931～2011）

で過ごしている。芥川賞を受賞した「忍ぶ川」を始め、短編「ブンベと湯の花」、児童文学「ユタと不思議な仲間たち」など、金田一やその周辺を舞台とし、自己を投影した小説が多い。「ブンベと湯の花」では冒頭と最後に金田一駅の風景が印象深く描かれている。「ユタ」はミュージカルの定番だが、金田一温泉に伝わる「座敷わらし」伝説をモチーフとし、都会から温泉の村に引っ越してきた少年との交流を描く。

歴史に見る「温泉」⑨

三浦哲郎と金田一温泉

中野渡 一耕

（県民生活文化課

県史編さんグループ 主幹）

〇）と金田一温泉（岩手県二戸市）について取り上げる。

哲郎は八戸市の生まれであるが、父の実家が金田一温泉だった。哲郎自身も戦時中に八戸から疎開した際と、昭和20年代半ばに大学を中退して帰郷し、再び上京するまでの一時期を当地

泉南から岩手県北地方では古くからの温泉郷として知られ、三戸や名川方面からも多くの湯治客があった。馬淵川沿いの田んぼばかりお湯が湧出していたと言われ、藩政時代には湯田温泉と称した。岩手県の地名辞典類では「盛岡藩の指定湯治場のひとつで、侍の湯

と言われた」と書かれているが、その根拠は不明である。ただし、隣接する八戸藩の藩士も湯治にしばしば来ている。もともと、金田一より遠隔地にある鹿角大湯（秋田県）や下風呂（下北郡）に比べるとその数は少なく、筆者の調査では、疥癬など皮膚病の治療が主だった。最寄り駅である金田一駅（現金田一温泉駅）の開業は1909年（明治42年）のことで、より来訪に便利になった。現在は観光の多様化などに伴い、金田一温泉も若干活気をなくしているようにも見える。「座敷わらしの宿」として知られる緑風荘の焼失も痛手であった。しかし、三浦哲郎ゆかりの地を歩くルートマップづくりなど、温泉街の人たちによる活性化の努力は続いている。大型観光地でなくても「村の湯治場」の雰囲気をも大切に残してもらいたいものである。